

郡上市 NPO法人メタセコイアの森の仲間たち

野生生物保護管理事業

害獣から食肉市場創出

長良川の上流域に位置する郡上市。清流を育む母なる森林は、市の面積の約9割を占める。そんな森林の健全を保つのに欠かせない里山を守ろうと、害獣をもたらず野生生物を集落ぐるみで捕獲する体制づくりに奔走しているのが、同市のNPO法人「メタセコイアの森の仲間たち」。代表理事興膳健太さん(30)は「ずっと暮らし続けられる郡上をつくりたい」と目標を語る。メンバーの大半は30代前半。若者たちの熱い取り組みにも、県の「清流の国ぎふ森林・環境税」が活用されている。

シカやイノシシの肉で作ったジャーキーやソーセージを発売した。

自分たちだけで

野生動物の捕獲に乗り出したのは2009年。農業オベレーターとして働きながら農閑期の冬場に狩猟を生業(なりわい)とする人材の育成を——と、県が「田舎暮らしビジネス創出支援モデル事業」として支援したのがきっかけだった。イタインの若者2人とともに興膳さんも狩猟免許を取得。猟師が自活できる道を探り、10年冬には狩猟からジビエ(野鳥獣の食肉)を使った商品開発までを担う下部組織「猪鹿庁」を立ち上げた。

一方で猟師となり、鮮明に見えてきたのは害獣に苦しむ農家の人たちの姿。「猟師も後継者不足に困っているけど、農作物の被害を受ける農家はもっと困っていた」。地域の悩みに正面から向き合い「農作物を」守り、「野生動物を主体的に捕獲できる集落倍増計画」を打ち出した。計画は明快だ。猪鹿庁のメンバーが培ってきた捕獲のノウハウを集落の人たちに伝えながら、初期投資というハードルをなくすため、おりやわなど必要な道具を極力無償で貸し出し、獲った後の処理も手間賃だけですぐに食べられる状態にまで加工して、住民たちの意欲を維持する。

いち早く呼応したのが郡上市八幡町の西和良地区の3集落。昨夏から支援を受ける洲河集落では若者たちの熱意に感化され、70代の2人が今月、狩猟免許を取得。自分たちだけで害獣を駆除していく意志を行動に示した。「自立支援を進める僕たちにとって顕著な成果」と興膳さん。「行政に頼ることなく、自分たちだけでもやっていけるという集落をもっと増やしたい」

「猪鹿庁」を立ち上げた。



洲河集落の住民とともに仕掛けたおりの様子を確認する興膳さん(左)。「集落ぐるみでの活動が増えれば、自治力も養われるはず」=今年1月、郡上市八幡町西和良

ドルをなくすため、おりやわなど必要な道具を極力無償で貸し出し、獲った後の処理も手間賃だけですぐに食べられる状態にまで加工して、住民たちの意欲を維持する。



興膳健太さん(前列中央)ら猪鹿庁の主要メンバー。活動理念に掲げるのは「里山と生きる」=郡上市大和町

愛着と夢を込め

非営利団体とはいえ、ボランティアではない。最低でも職員4人の人件費は賄わなければいけない。特製のおりこそ販売しているが、もうけは薄い。それでも支援に打ち込むには訳がある。「いつか野生動物を害獣ではなく、食肉として売れる資源へと変えたい。獲って肉を売り採算が合う」。市場を創出して初めて支援が完結するんだと思う」と興膳さん。彼らは特製のおりを「肉の畑」と名付ける。そこには郡上への心からの愛着と夢が込められている。

清流の国ぎふ森林・環境税を活用した事業の紹介【4】 野生生物保護管理事業

～生物多様性・水環境の保全～

野生生物による農林業や生活環境への被害の軽減及び生態系の保全や外来生物(アライグマ、ヌートリア等)による生態系への影響の防止を図るため、市町村がおこなう事業の経費を助成しています。

- ◆ニホンジカの個体数調整のための捕獲
- ◆特定外来生物捕獲用のオリ及び処理施設の購入
- ◆有害鳥獣捕獲従事者の育成 (実施主体)市町村



郡上市内で捕獲されたニホンジカ(郡上市提供)

事業の詳細は、県庁自然環境保全課へお尋ねください。